

《研究ノート》

J・A・ホブソンの経済學の基盤について

清水 嘉 治

内外におけるJ・A・ホブソンに関する評價は二つの面からなされてきた。第一には、厚生經濟學者としてのホブソンであり、第二には、一般的に知られる「帝國主義論」の科學的研究の先驅者としてのホブソンであった。これら二つの方面からの評價は、まだ完全充分なものではないけれども、一應前者は、近代經濟學者によって、後者は、マルクス經濟學者によって究明されてきたといってもよいであろう。前者の場合には、彼の處女作であり、また經濟學の異端者の取扱いをうけたといわれる「産業の生理學」(The Physiology of Industry, 1889)が、ケインズの「一般理論」に示唆を與えたという點、また後者の場合には、レーニンの「帝國主義」研究への示唆を與えたとい

研究ノート

う點での評價である。

もちろんホブソンの經濟理論、經濟社會思想を體系的に検討する場合には、社會思想家および社會學としての彼をも全面的に取上げて究明しない限り、彼をイギリス近代經濟思想史に正しく位置づけることはできないであろう。

わたくしが、ここで試みることは、内外におけるJ・A・ホブソンの二つの面からの評價が、あまりにも極端化していることにたいする一つの反省である。つまり彼の「産業の生理學」における經濟理論を全面的に發展させた「産業制度論」および「富の科學」と「帝國主義論」に展開された經濟學とは有機的に關連をもっているという點である。そのためまずはじめにかかるとの諸作がかかれた事情を彼の初期の生活と業績を簡單に素描する中に求め、つぎに兩者の關連を素描的にのべることにする。

二

ジョン・アトキンス・ホブソンは、一八五八年七月八日英國中部の半ば織物業の盛んなダービー市のほまれある中産階級の家産に生れた。父は、Derbyshire Advertiserに關係したジャーナリストであり、同時に當時有力な自由黨の黨員であった。母は教養の高いクリスチャンであったという。ホブソンの家庭は、宗教的市民感情の豊かな雰囲気にも包まれていた。ホブソンは、かかる中で育み、大學にゆくまで、彼自身、家庭の宗教的行事に敬けんな氣持でしたがった。だが彼の外側の宗教的

狀況は、彼を氣のすすまない意識にかりたてた。といふのは、宗教的雰圍氣の濃厚な都市であるダービー市では、いつも國教派と非國教派との争が絶えなかつた。彼は、かかる宗教界内の宗派的・政治的・感情的對立に好感をもたなかつたから。これは、彼が大學二年のとき、宗教問題に懷疑となり、盲目的信仰への反省を促し、「道德的、理性的な人格としての自己意識」ある信仰を強調し、これは、あとになって「宗教と科學」についての一論文の中に抵抗的に表われたのである。

彼が一八七六年オックスフォード大學入學まえにうけた教育は、ダービー市のグラマー・スクールであつた。ここでは主に古典學、歴史學、文學を學んだ。古典學の教師は、古典を無味乾燥な内容に解し、また生徒の心情や態度を無視したことや、歴史學は、近代政治以前の英國史のみに限定され、それも國王や支配階級の活動のみを取扱つた内容のものであり、文學も言語學的のみにとどまつた活氣のない授業であつたことを述懐している。社會科學の面では、ミルの「功利主義」「自由論」スペンサーのものをよんだという。ここでは、私的に、ミルトン、シェクスピア、テニソン、ポーブなどをよんだが、また本格的な讀書ではなかつたらしい。

一八七六年、オックスフォード大學のリンコン・カレッジに入學し、一八八〇年に卒業した。

ここでの四年間は、主として古典的文學、歴史、ギリシャ・ラテン文化の哲學的研究に没頭した。社會學では、ラスキン、

スペンサーのものに傾注した。これは、後になって經濟學にヒューマンイズムと合理主義を適用するに役立った。經濟學では J・S・ミル、A・スミス、W・S・ジョボンスのものなどをかなり讀んだが、まだ生涯の學問研究としての經濟學をすすめてゆくだけの決心はなかつたようである。彼の大學には、ベンジャミン・ジョウエット、T・H・グリーン、マーク・パチスンなどの指導的學者がいた。彼の關心は廣く人類學、心理優生學を含めた社會科學にも及んだ。

この當時の英國は一八七三年の深刻な恐慌の餘波をうけつぎ、英國資本主義の構造的危機を呈していた。政治的には、一八七六年、デイズレーリが近東方面への帝國主義政策に積極的のりだし、ヴィクトリア女王にインド女帝の稱號の捧呈を提案した時期であり、國內的には、一八八一年、英國ではじめてマルクス主義の影響をうけた唯一の團體、社會民主連盟が設立された程、労働運動が、最も活潑におこつた時期であつた。

古典學と社會科學的教養を豊富にもつて、一八八〇年大學を卒業し、フェバーシヤムとエグゼターで古典學の教師を務めた。この間ひそかに A・スミス、J・S・ミル、J・ラスキンの研究を試みた。一八八七年ここをやめ、オックスフォード、ロンドン兩大學の公開講座の講師にえらばれた。ここでは、經濟學、古典學などを講義の材料にした。さきのエグゼターで教師をしている間に知り合ひになつた實業家マンマリーと屢々經濟問題について論議し、とくにマンマリーの過剩貯蓄論に感動

した。これが契機になって、古典派経済学への疑いの目を向け、これは、一八八九年マンマリーと共著で處女作『産業の生理學』(The Physiology of Industry) となって表われたわけである。この書が、古典派経済學の過剰投資否定論の誤謬をついた最初のものとして知られ、またこの結果、彼は「經濟學の異端者」の烙印をおされ、これはさらに、彼の身分問題にまで及び、ロンドン大學の經濟學、文學の公開講座の講師を斷念せねばならない破目におち入った。わずかにオックフォード大學の公開講座で労働者階級の現實問題に限って話すことを許されたにすぎなかったが、これも同大學の教授連から、消極的な非難をあげ、一八九七年、ここをもさらなければならなかった。

さきの「産業の生理學」は、近代景氣循環の解明の端初として過剰貯蓄、過少消費論を展開したものと、ケインズは、經濟思想における新紀元を示したといっている。

さきの講師在職中に、彼は近代資本主義の歴史的進化・發展の問題を考え、他方従来の經濟學が、經濟を政治、思想と切り離して分析していることに不満を感じ、社會思想の問題を深刻に考へた。前者の問題は、一八九四年「近代資本主義發展史論」(The Evolution of Modern Capitalism) となつて、後者の問題は、一八九八年社會改革者「ジョン・ラスキン論」(John Ruskin; Social Reformer) となつて結實したことである。また「産業の生理學」の具體化、すなわち過剰貯蓄過少消費に起因する所得分配の不平等を實態的に分析し、とくに所得の惡

研究ノート

分配の結果おこる労働者階級の貧困の状態を取扱ったものとして「貧困問題」(Problem of Poverty; an inquiry into the industrial condition of the poor, 1891) があり、これは五年後にかいた「失業問題」(The Problem of the unemployed; an enquiry and an economic policy, 1896) と内的關連をもっている。その意味では、彼の經濟理論と政策論とは統一的に把握する必要がある。だがここで注意すべきことは、「近代資本主義發達史論」における豊富な歴史的分析の手法は、處女作である「産業の生理學」における經濟理論、過少消費説の歴史的展開ではないということである。彼の理論と歴史觀には若干の矛盾を感じざるをえない。ともあれ、「發達史論」をかいたことによつて「異端」的地位を強くしたことは事實である。

彼は一八九七年講師をやめてから、専らジャーナリストとしての活動を展開した。九八年に雑誌「Progressive Review」に關係し、ここで社會主義者といわれたR・マクドナルド、G・M・ロバートソンなどと交際し、他方で八〇年代に協力した「倫理運動」に再び積極的に参加し、この實踐運動のなかで、G・H・ミューヘッド、B・ボサンキットと親交を結んだ。その後雑誌「The Speaker」ののち後紙「The Nation」および日刊紙「Manchester Guardian」にたびたび寄稿した。とくに指摘すべきことは、一八九九年三月、英國の南アフリカ政策に關する一論文を「Contemporary Review」にかいたことが、ホップハウスに認められたこと、また同誌の編集者スコッ

トに奨められ、南アフリカに特派員として派遣された。⁽⁸⁾ここで彼は九九年のボア戦争を體で感じとった。この戦争こそ、學者としての、ジャーナリストとしてのホブソンにとって一大事件であった。この戦争に強く反対した。同時にこの事件こそ彼の仕事の轉換點であり、これ以後の仕事に決定的作用をし、彼はここで政治と經濟との眞の關係を理解したのであった。英國の一部のもののやばんな帝國主義政策を批判した勞作をつぎつぎに發表した。最初の勞作は、「南阿戰爭」(The War in South Africa, 1900)となつて、翌年「主戰論者の心理」(The Psychology of Jingoism, 1901)となつて世にだされ、英國の帝國主義政策を正面から批判した。これら二著を足場に一大勞作「帝國主義論」(Imperialism, 1902)をかいたのであった。この著作の成立の契機は、彼の社會實踐運動の中で、經濟學的には過少消費論を基盤にし、社會學、政治學とを統一につかむことによつて完成したのであった。彼はその後一九一〇年頃まで、ジャーナリストとしてスイス、デンマーク、アメリカなどに旅行した。この間に、「産業の生理學」の理論的發展として「産業制度論」(The Industrial System, 1909)これを凝縮した形でまとめあげたのが「富の科學」(The Science of Wealth, 1911)であった。この時期は、油ののつたジャーナリストであり、その活動は多方面にわたつた。だがかかる中でこの二著をかいたのは、あくまでも自己の經濟學を完成するためであった。現實の社會の動きを正しく洞察しながらも、他方彼はつ

ねに經濟學會や社會學界の動向を把んでいた。一時は、「アカデミー」の靜かな場所⁽¹⁰⁾での體系的研究に思をはせたこともあったという。だが彼は、社會の第一線の中で活動する中で、經濟學研究を押し進めたのであった。さきの二著の完成も、アカデミーへの一つの抵抗、挑戦でもあったのだらう。彼は二著の成立事情について一言もふれていない。ともあれホブソンの經濟學の基盤は、「産業制度論」「富の研究」によつて確立したものと、いつてよいであらう。

三

以上で「産業の生理學」「産業制度論」「富の科學」「帝國主義論」等の成立事情の一端がほぼ明らかになつたであらう。ここで、とくに處女作の發展の結實である「産業制度論」における經濟理論の核心をのべ、同時に帝國主義論の經濟學的基盤を問題にしたい。

彼の經濟理論の中樞的なものは、不勞所得分析の中に表現されてゐる。彼は、産業制度論のなかで、地代、利子、利潤、賃金などの各所得を次のように分類する。「A、維持費、B、生産的剩餘(擴大生産にあてられる費用)、C、非生産的剩餘(浪費)⁽¹¹⁾」である。これをさらにのべると、Aは次の四つの部分を含む、(1)生産の規則的作用に要する各種の勞働と能力とを、現在の能率に維持するに必要な最低賃金。(2)機械器具、その他固定資本の消耗償却。(3)土地の消耗手當。(4)國家が産業につくす公

務維持の手當等であり、Bは、(1)産業組織の擴大、改良のため、労働と能力との數量をまし、品質を改善すべき能率増進に關する最低賃金。(2)労働供給の増加および改善と協力するに要する新資本の供給を喚起するにたるだけの最小限の利子。(3)國家が産業に盡す公務の容積、能率の改善にたいする手當等の三つからなり、Cは、(1)土地および他の自然的資源にたいする經濟上の地代。(2)Bにのべた割合を超過するあらゆる利子。(3)競争上均等な條件のもとに、才能もしくは労働をして充分利用するにたる報酬を超えるもの、或は労働に支出するあらゆる利潤、俸給その他の報酬などを含むものである。

右にのべたことから、わかるように、彼はつまり資本主義社會が、一方では各生産要素の維持費以上につくりだしている剰餘の多くが、地主、資本金、經營者の手中に過剰所得 \parallel 不勞所得として入ってゆくことを、他方では、自己の生活を維持してゆくに必要な所得さえうることができない階層が存在していることを強く指摘するために不勞所得を問題にしたわけである。このように所得分配の不平等は、近代資本主義社會に固有なものとして存在し、この過剰所得は、浪費の源泉であり、つまり無計畫な消費 \parallel 奢侈と、過剰所得の貯蓄は、過剰投資を結果し生産と消費の均衡破かいになり、したがって「不勞所得の存在は、購買力と相應した財貨供給に必要な限度を超えた新資本の投入をもたらし、かかる過剰資本が生産過剰を結果し」これがまた彼の恐慌論の核心でもある。かかる過剰貯蓄、過少消費論

は、彼の經濟理論の基盤であり、「富の科學」「産業制度論」の中に一貫した赤き糸として流れている。かかる過少消費説を容易に一貫して展開することは、彼が、その後、人口、需要、生産方法の一定の靜的な經濟社會を假想しているからである。つまり、社會の年々の所得は、年々の消費のために生産される財貨、用役と一致するものであり、各生産要素の擔い手である地主、資本金、労働者は、最終生産物の價格の一部をうけとり、その貨幣所得が、各生産要素を維持し、あたらしい生産活動をおこなうに必要な刺戟をあたえるのであるから、かかる社會では深刻な分配問題は生じないというのである。ところが現實の資本主義社會は、反對の方向に運動している。その要石として問題になるのがさきの彼の不勞所得の分析であつたわけである。(またここから社會主義論をも展開する。)

かかる過少消費説は、帝國主義の經濟學の分析の基盤になつてゐることである。彼は帝國主義の植民地は、人口の捌け口として、貿易上、商業上の價値としては、いかに微々たるものであるか⁽¹⁴⁾を統計的に實證し、とくに重要なことは、帝國主義國內において過剰になつた資本は、投資家の利益のために獲得されたものにほかならないことを強調するのである。ホブソンは「帝國主義論」で投資こそ、「帝國主義において、ほかのなにものにもまさつて重要な經濟要素」であるとのべ、それは、第一に對外投資に對する利子としてえられる所得が、普通の輸出入貿易に對する利潤として得られる所得をはるかに凌駕したこと。第

二に、英國の對外および植民地貿易ならびに恐らくそれからの所得が緩慢に増大したに過ぎないのに反して、外國投資からの所得を表わす英國の輸入價格の部分が甚だ急速に増大したことを強調することによってより明瞭である。したがって「侵略的帝國主義は納税者には、甚だ高價につき、製造業者および貿易業者には甚だ價値が少く、國民にとっては甚だ重大な測り知れない危険を孕むものであるが、投資家にとっては大きな利得の源泉であつて、彼は（投資家）自己の資本のため有利な用途を國內にみつづけることができず、したがって彼の政府が、彼を援助して有利かつ安全な投資を國外になさせるべきであると主張する。」かかる引用が示すように、ホブソンは、近代帝國主義は、投資家、金融業者の地位が、商業資本より優位なることとくに指摘するのである。だからといって商品輸出を無視するといふのでなく、「帝國主義は、國內において賣却し、使用しえない財貨、資本を取り去るために海外市場、海外投資を求めらるゝことも忘れずにのべていること、したがって過剰商品、過剰資本の強力な作用が帝國主義的政策の契機になるわけである。かかる過剰商品、過剰資本が、いかに發生するか、この源泉を、彼は「國內に財貨および資本を吸収することを妨げている消費力の誤れる分配」に求めるのである。ここにわれわれは、さきにのべた彼の經濟理論の端的な表現が存在しているとおもうのである。かかる指摘は、「帝國主義の經濟的根柢」の章に、すい所にみられることであり、とくにその典型的な表現を

私なりにつかんでのべると帝國主義の經濟的基礎である過剰貯蓄は、地代・獨占利潤およびその他の不勞所得分からなっている。それは頭腦または肉體勞働によつてえられたものでないから、正當の存在理由をもっていないだけでなく、生産の煩勞に對して何ら自然的な關係をもっていないのでその獲得者に相當の満足させない、したがつて過剰貯蓄になる傾向があるといふのである。近代帝國主義が、武力を背景とする植民地獲得の動機にでるのも、所得分配の不合理から發生するものである。したがつてホブソンの論理は、國內におけるこの不合理性を除去しない限り帝國主義政策の根源を究明することはできないといふのである。

ともあれ彼の經濟學の基盤が過少消費説にあり、それが「帝國主義論」の經濟學を性格づけているかがわかるであらう。

(1) ここで、「厚生」といふ意味は、所得分配の不平等を是非する観点から社會の厚生といふ廣い意味である。P・T・ホームマンは、半ば學說史的に厚生經濟學者としてのホブソンを取り上げていることである。またケインズやクラインは、厚生經濟學という政策的観点からのべているわけではなく、ホブソンの過少消費説を近代經濟學的に評價したにすぎない。この意味では、厚生經濟學者としてのホブソン評價の範疇には入らない。たゞホブソンの貯蓄分析を評價した點で、一應それに近い立場としてとりあげてみた。例えば、ケインズは、ホブソンの經濟學の系譜を「マ

「ハイヴァー・マルサス・ケゼル・ホブソン」という意圖で、これら諸君を註田せり。J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936, pp. 367~371 (鹽谷譯四六一—四七三頁) また J. R. スラインは「ケインズ革命」の中で、ホブソンを「一般理論」の先驅の章で、「ホブソンは、確かに最もすぐれた過少消費論者の一人であつて、マルサスの傳統をうけつた最初の一人であつた」(ホブソンがケインズ經濟學に果たした眞の貢獻は、貯蓄およびそれが經濟活動の水準に果たらす効果についての分析にあつた)とのべつてゐる。L. R. Klein, *The Keynesian Revolution*, 1947, pp. 136~137 (篠原・宮澤譯一七二—一七三頁) 磯藤浩一氏はホブソンの「厚生經濟學の側面」を學說的に取り上げつゝの點注目すべきものである。(明學論叢二〇號) そのほか、ノーンズ、アリ、オ、ヒ、ス、(J. D. H. Cole, *Economic Journal*, June~Sept. 1940, 224~240)

(2) V. N. Lenin, *Der Imperialismus als Höchstes Stadium des Kapitalismus*, 1916, SS. 104, 112—113, 133~135. また靜田教授は「帝國主義の經濟學說史の一環としてホブソンの「帝國主義」をとりあげてゐる「帝國主義の經濟學」(京大「經濟論叢」七〇卷三號、同上七十四卷三號) 拙稿「ホブソン試論」(「經濟系」三三號) を参照せよ。

(3) J. A. Hobson, *Confession of an Economic Heretic*.

tic, 1938, pp. 16~17 H. N. Brailsford, *The Life-Work of J. A. Hobson*, 1948.

- (4) J. A. Hobson, *Confession*, p. 17.
 (5) H. N. Brailsford, *The Life-Work of J. A. Hobson* 1948, p. 5~6. J. A. Hobson, "Confession", p. 84.
 (6) H. N. Brailsford, *cit.*, p. 5
 (7) J. M. Keynes, *cit.*, p. 370
 (8) J. A. Hobson, "Confession" pp. 59~60
 (9) 私著「わが帝國主義の成立事情」經濟學・政治學・社會學の統一として把握した。(拙稿「ホブソンの思想と生涯」(「經濟系」三三號二九—三〇頁))
 (10) J. A. Hobson, *Confession*, p. 82—84.
 (11) J. A. Hobson, *The Industrial System*, 1909, pp. 79~80.
 (12) J. A. Hobson, *cit.* p. 80 *The Science of Wealth*, 1911, pp. 85~86.
 (13) *The Industrial System* p. 9—10
 (14) J. A. Hobson, *Imperialism*, 1902, chap II, III, *cit.*, p. 56 (穴内原譯一〇二頁)
 (15) *cit.*, p. 63 (同右譯一〇六一—一〇七頁)
 (16) *cit.*, p. 86 (同右譯一三六一—一三七頁)
 (17) *cit.*, p. 91 (同右一四二頁)
 (18) (一九五六年十二月脱稿)(一橋大學普通研究生)